

第 113 回生涯学習分科会の検討課題への回答

関 福生

1. デジタル社会における急激な社会変化の中で生涯学習・社会教育が重点的に果たすべき役割は何か。

★誰も取り残されないように、デジタルデバイドを緩和していくための学びの場を提供すること

現状では厳然とした情報格差が存在し、このまま放置しておくとは益々広がっていくという前提に立った早急な対応が必要と考える。

新型コロナウイルスワクチン接種の申し込みや様々な支援策がネット対応で実施されるようになり、利用できない人が不利益になる状況が続いている。公平性を担保し、誰も取り残されない社会をつくるためにも、誰もが情報化の恩恵を享受できるよう学びの機会を拡充しなければいけない。

今回、リモート研修を行って感じたことは、従来は同じ教室に集い、同じ機器を使った一括型の研修を進めてきたが、現在はパソコン、タブレット、スマホと様々な ICT 環境が活用されているので、日常的に自分が利用している機器に即した個別分散型研修でないと意味をなさないことを思い知らされた。

公民館等の強みとしては、社会教育施設ゆえ安価な負担で学びの場が提供できること、普段つながりのある身近な人と一緒に、分からないところに手が届く、親切丁寧な学習機会の提供が図られると考える。既に使える人と全くの初心者の差が大きいので、最初の一步を踏み出すには、誰かの巻き込みが必要で、公民館であれば日常の人間関係でハードルが低くなると考える。

また、ギガスクール構想でタブレットを使える子ども達が増えていると思うので、社会教育領域で子ども達が高齢者に教える場を提供できれば、世代間の交流が促進されると共に、地域学校協働活動も学校や子ども達への支援だけではなく、双方向性を持つものによっていく可能性が高まると期待している。

課題としては、現在の社会教育施設の ICT 環境の脆弱さが上げられる。少なくとも Wifi 環境の整備は必須であり、地域に眠る指導者の発掘も急務である。

2. 生涯学習・社会教育が持続可能な地域社会を形成・維持していくために、学びの過程はどのようにあるべきか。

内田委員の「よりよい場の状態と個人のウェルビーイングの循環」、乾氏「新しい知の創造のための学習」の8の字モデルに共感する。それぞれの場、世代に応じた学びのマネジメントサイクルをデザインすることが大事で、従来の社会教育には、目指すべき地点が定まらないままで、場当たりの進んでいくものが多かったような気がする。まさにSDGsのアプローチを採り入れ、目指すべき目標を明確化し、取組む姿勢を持つべきだと思う。

その上で、大事にしたい視点として、

- ①現状を想像ではなく、事実として把握すること
- ②他者から学ぶ機会を組み込むこと
- ③異なる価値観や意見を持つ他者の対話を重ねること
- ④学びをその場所限りにせず、地域住民と情報共有すること

社会教育ではこれまで経験や感覚に頼り、実際に住民が何をどう考えているかをマーケティングすることが少なかった。担当者の個人的な思いと住民の思いが一致しているかを掴むことなしには的外れな事業展開になることを感じてきた。理想と現実とを見極めたうえで、理想の実現に向けた取り組みが必要で、新規の事業や長期的なまちづくりの戦略策定にあたっては、事前に住民への意識調査を行うことなどを経ることが必要ではないか。

他者から学ぶバリエーションは新型コロナによって大きく広がった。リモートで対応することで、幅広い講師や内容が提供され、全国各地の仲間達とのつながりが格段に増えた。つながっていこうとする積極性さえあれば、学びが拡がる可能性が高まった。社会教育関係者は新しい学びにアプローチしていくべきだと思う。

「対話」する場面が少なくなった。新型コロナで集まることができなくなり、リアルで思いをぶつけ合うことができなくなったこともあるが、異なる考えを持った人と意見を交わし合って、共通理解を見出す努力をすることが減ってきた気がしてならない。ダイバーシティを認め合える社会を実現するには、まずは対話が不可欠だと思うのに、いつの間にか対立を恐れ、社会教育の場から対話が失われていることを危惧している。子どもだけではなく、大人にもアクティブラーニングの大切さを訴えるべきだと思う。

住民に何をやろうとしているかを周知するためにも、情報はどんどん外に発信していくべきだと思う。住民の内でも学びの場に参加する人はごく少数である。ほとんどの人は、何が起きているかを知らない。ネット上で発信するだけではまだまだ情報は伝わらない。アナログ情報を送り届けることで学びを拡散

させることや、口コミで伝えることを怠ってはいけない。発言した人の顔が見えることで、地域の人は何が起こっているかを体感し、発言した人は自分の発言に責任を持ち、地域の全体の行動が変容することを体験してきた。

それぞれの地域によって理想の学びのスタイルは違うと考える。新しい学びのマネジメントスタイルの構築は対話の過程の中で出来上がるもので、その過程が地域の経験知になるものとする。